

「おや、ウランフ提督、お帰りですか？」

軍服姿がせわしなく行き交う、夕刻の宇宙艦隊司令部のロビー。そこを横切っていた第十艦隊司令官ウランフ中將は、その声に振り向いて若い部下の姿を見出し、片手を上げた。

「おう、アッテンポローじゃないか」

彼の下に配属されている分艦隊司令官ダステイ・アッテンポロー中將であつた。簡単に敬礼しながら、歩み寄ってくる。

「今日はまた、めずらしく早いお帰りですね」

このところ、あの遠征準備で多忙でしたのに。副音声でそういった部下に、ウランフは苦笑した。

「いや今晚は、このあと予定があつてな」

「予定？」

アッテンポローは小首をかしげた。ウランフはうなずいて説明した。

「今度の遠征に参加する、艦隊司令官の顔つなぎの会合だ……というか、まあ、呑み会だな」

「呑み会」

意外な単語をおうむ返しにした部下の反応に、ウランフは肩をすくめてみせた。

「誰が言い出したか知らんが、これから敵地深く侵攻していくのに、司令官同士が気心も知れないではやっていけないだろう、というこころらしい」

「はあ……まあ、一理ありますね」

人類始まって以来、酒食をとにもする、というのはコミュニケーション

ーションの重要な手段の一つである。宇宙に進出して千年以上が経過しても、人間の本质とはそう変わらない。

「ん？ と、いうことは」

だがそこでアッテンポローは、がばつと顔を上げた。

「ヤン先輩も来るんですか？」

「あ？」

その勢いに戸惑いながらも、ウランフはうなずいた。

「ヤン・ウエンリーか。そりや来るだろう……というか、むしろ、彼が主賓じゃないのか」

何しろ新任だし、それでいきなりイゼルローンを攻略してのけた当人だぞ。司令官たちの間でも興味津々だからな、と続けてからウランフは反問した。

「というか、貴官、知りあいなのか？」

「士官学校でおれの二年上の先輩です。門限破りを見逃してもらつて以来、仲良くつきあっていますよ」

簡単にそう説明してから、アッテンポローはやおら、真剣な表情になつて現在の上官に向き直つた。

「ウランフ提督」

「なんだ？」

「上官の健康を願う部下として、心の底から忠告いたします」

「？」

「ヤン先輩、いえ中將と呑むのなら、ぜつつつたいに、やつてはいけないことがあります」

ウランフはそう告げた若い部下の顔を見直した。勇將と評され

る彼をして、思わず後ずさらせるほどの迫力であった。

「ここか、とウランフは店の看板を見上げた。宇宙艦隊総司令部にほど近い店の一つ、ランクとしては上の中、というところか。

値段も相応だがまあしかなかった。中将が八人も集まる、となればそれなりの店の格は必要になってくる。一般兵や士官に混じってどんちゃん騒ぎをする、というわけにもいかないのだ。

だから無論、個室を予約してある。周囲が気を遣わなくてもいいように、話題が多少、機密ないし物騒な方向に走ってもいいように、そしてまあ、やや外聞を憚る事態になっても問題ないように、だ。

何しろ、あの帝国領侵攻作戦の作戦会議と準備で、このところストレスを溜めている司令官たちである。どういう酔っぱらい方をすることやら……と考えている背中に、穏やかな声かけられた。

「ウランフ提督、いまおいですか？」

ウランフは振り向いて、そこに、敬礼している、先ほどの話題の主な姿を見出した。黒髪黒目、軍人というより線の細い若手の学者にしか見えない中将。

その戦歴と同じく、どう見ても、部下の忠告のような人物には見えないんだが、と考えつつウランフは片手を上げた。

「おう、ヤン・ウェンリー、貴官もいまきたところか」

その声に、敬礼した手でヤンは頭を掻いた。

「ちよつと打ち合わせで遅くなりまして。もとの第二艦隊までうちに再編成されて、定数を満たしてくれたのはいいのですけど、また艦隊運用を再検討しなくてはならなくなつて」

「……大変だな」

ウランフはしみじみ同情した。もともと、この若い司令官の第十三艦隊はアスターテの敗残兵と新兵の寄せ集めだった。この司令官一人の頭脳から出たほとんど奇術のような作戦で、イゼルロンを攻略してのけたが、本格的な艦隊戦が予想される今回は、それではすまない。艦隊運用の検討に訓練に演習にその結果の再検討、そしてまた訓練、とそれはもう必死だろう。もともと一個艦隊として組まれていて、それなりの練度もある自分たちの艦隊とはわけが違ふのだ。

「まあ、副司令官がいてくれるので、なんとかなりそうですけど」

「フィツシャー准将だったか。いい副司令官を見つけたな」

「ほんとうに、宝です」

心からうなずく若い司令官の真摯な表情に、なるほど、この青年のこういうところが、そのフィツシャーを初めとするずっと年長の部下たちに心服され、命を預けさせる理由なんだろうな、とウランフは感じた。

柔弱そうで、まったく軍人らしく見えなくても、この青年は確かに、指揮官として得がたい資質をもっている。

「では行くか。きつともうできあがっているぞ、あいつら」

「……はい」